

依存症の新たな集団治療プログラムへのエントリー基準の探索

—バウムテストの特徴から—

○板橋登子¹・早坂透¹ (非会員)

(¹神奈川県立精神医療センター)

キーワード：依存症, バウムテスト, 基本的信頼感

Investigation of Selection Criteria about Group Approach for Inpatients with Substance Use Disorder -Findings in Baum Test-

Toko Itabashi¹, Toru Hayasaka^{1, #}

(¹Kanagawa Psychiatric Center)

Key Words: addiction, Baum test, basic trust

目的

アルコールまたは薬物依存症の入院治療において、表面的な適応に終始して内的な葛藤の洞察に至ることなく退院し、再飲酒・再使用を繰り返すケースが少なくない。我々は、このようなケースにおける、信頼感の障害を背景にした感情への気づきや表出の困難さの課題解決を目指した新プログラム (Serigaya Collaboration for Open heart Project; 以下 SCOP と略記) を開発した。SCOP に参加し、感情表現を他の参加者やスタッフに受け入れられることによって基本的信頼感を育み、不安の解消や欲求の充足を物質ではなく他者に求められることで、例えば地域の自助グループへの所属など、行動上の変化を示したケースも見られた (早坂他, 2014)。

感情を扱うことは一般的にも侵襲性が高いが、特に依存症者の場合は侵襲的になりやすく、SCOP へのエントリーの可否を慎重に吟味する必要がある。多職種カンファレンスによって検討を重ねているが、基準が一貫せず判断が難しいケースも存在する。心理検査も重要な一資料となり、特にバウムテストは言語的に表現できない自己イメージや環境への関わり方などを把握できるので、参加者選定のアセスメントツールになることも期待される。本研究では、依存症病棟の入院患者の SCOP 参加状況別によるバウムテストの結果から、依存症の中でも、感情を集団の文脈で扱うことが適するパーソナリティを持つ者の特徴について検討することを目的とする。

方法

首都圏にある A 病院の依存症病棟に 2014 年 4 月～2015 年 2 月にアルコール依存症または薬物依存症の診断で入院し、原則としてプログラム実施前に 60 歳以下の入院患者全員に実施するバウムテストを受検した 114 名を対象とした。内訳は男性 74 名 (平均年齢 40.35±10.60)、女性 40 名 (平均年齢 39.13±11.32)、診断はアルコール依存症 55 名、薬物依存症 51 名、アルコールと薬物の重複例が 8 名であった。本人が SCOP への参加を希望し、かつ多職種カンファレンスにより参加適と認められプログラムを終了した 39 名を「継続参加」群とした。本人が参加を希望しなかった、希望したが多職種カンファレンスで参加不適と判断された、参加したが中断した 75 名を「不参加」群とした。バウムテストは A4 版の画用紙・2B の鉛筆・消しゴムを用い、“実のなる木を一本描いてください”という教示のもと実施した。量的指標は Mann-Whitney の U 検定を用いて、質的指標はその出現人数について χ^2 検定を用いてそれぞれ検証を行った。

結果

量的指標は、2 線枝数において継続参加群が有意に多かった ($p<.05$)。木の大きさを示す、木の長さ・幹の高さ・幹の幅・樹冠の高さ・樹冠の幅・空間使用数 (国吉他, 1980) の比較を行ったところ、いずれの項目も両群に統計的な有意差は見られなかった (表 1)。質的指標は地平線が 1%水準、根・枝が 5%水準で、継続参加群に有意に多く出現した (表 2)。

表 1 プログラム参加状況とバウムテスト量的指標の比較

	継続参加群(N=39)		不参加群(N=75)		p
	Mean(SD)	Median	Mean(SD)	Median	
木の長さ(mm)	197.59(49.58)	203	204.76(58.07)	212	
幹の高さ(mm)	104.90(38.71)	103	111.79(41.24)	116	
幹の幅(mm)	29.10(10.61)	28	33.36(18.84)	33	
冠の高さ(mm)	110.87(33.35)	111	110.83(43.02)	109	
冠の幅(mm)	148.51(39.90)	154	140.63(79.10)	151	
空間使用(個)	2.74(1.39)	3	2.57(1.78)	2	
2 線枝数(本)	2.30(2.67)	0	0.93(1.87)	0	*

* $p<.05$

表 2 プログラム参加状況とバウムテスト質的指標の比較

	継続参加群(N=39)		不参加群(N=75)		p
	出現人数(出現率)	出現人数(出現率)	出現人数(出現率)	出現人数(出現率)	
地平線	20(51.28%)	16(21.33%)			**
根	18(46.15%)	17(22.67%)			*
枝	26(66.67%)	34(45.33%)			*

** $p<.01$, * $p<.05$

考察

継続参加群は、入院時のバウムテストにおいて、地平線・根・枝が多く出現しており、基本的な信頼感・安定感や、自身の無意識の衝動への意識、そして対人的な相互作用への興味を投影されていたことが示唆される。感情に働きかける SCOP は継続参加群の潜在的なニーズを満たし、他者との関係の中での感情表出やそれを受け入れられる体験に意義を感じ、治療を続けようという動機になったと考えられる。

不参加群においては、地平線の不在から抛り所の無い浮動性の不安、環境から支えられている安心感の希薄さ、1 線枝もしくは枝そのものを描かないことから対人関係の未熟・未分化が推測される。このようなケースでは、集団の中で感情に触れる体験は自我が脅かされると感じ、回避的になりやすい可能性がある。感情に焦点化する介入の前に、治療関係や社会生活において基本的信頼感を確立し、安心感や自己肯定感を積み重ねていく支援の必要性が窺われた。

引用文献

- 早坂透・小林桜児・渡會蘭子・黒川由美子・菊地千佳子・伊藤雅子・鈴木由紀枝・高橋富子・板橋登子・川副泰成 (2014). 物質依存症患者の感情調節に焦点を当てた多職種協働集団治療パッケージ SCOP の導入 (1), 日本アルコール関連問題学会大会プログラム・抄録集, 36, 225.
- 国吉政一・林勝造・一谷彊・津田浩一・斉藤通明 (1980). バウム・テスト整理表, 日本文化科学社.